

イチゴ新品種「佐賀2号」の育成

森 欣也・田中政信・中島寿亀・松尾孝則¹⁾・田中龍臣・中村典義
(佐賀県農業試験研究センター・¹⁾佐賀県農林部)

Kinya MORI, Masanobu TANAKA, Toshiki NAKASHIMA, Takanori MATUO, Tatuomi TANAKA and Noriyoshi NAKAMURA: A New strawberry cultivar "Saga No.2"

佐賀県のイチゴの栽培面積は約 350ha であり、野菜の中でも主幹作物である。しかしながら、近年生産者の高齢化と過労働の必要性などからその伸びは停滞傾向にあり、イチゴ生産振興のためには労力削減が最重要課題となっている。現在主力品種として栽培されている「とよのか」は、早生で、高収量、しかも香気性が高く食味に優れているが、開張性で花梗が短いため着色を良くする玉だし作業管理を必要としている。また、果実の大きさや形状から収穫、パック詰めの出荷作業に多大の労力を要している。

そこで、栽培管理がしやすい特性を持ち、果実の形状や品質に優れた、栽培と出荷の省力化できる品種の育成を行った結果、ほぼ目標に近いものを育成したので報告する。

1. 育成経過

1991年に「大錦」を種子親に、「とよのか」を花粉親にして交配した。交配実生 53 個体を養成し、促成栽培で優秀な形質を持つ 5 個体を選抜した。1992～1993年にこれらの系統選抜を行い、草姿、果実の着色、硬度と商品化率に優れた 1 系統を選抜した。1994年から生産力・品質、生理生態反応の把握のため栽培特性試験を行い、1995年から「佐賀2号」として現地適応性試験を実施し、有望と認められたので1997年3月に品種登録の申請を行った。

2. 特性の概要

草姿はやや立性で、草勢は強く、分けつ数は「とよのか」よりもさらに少ない。葉は大きく、葉数は少なく、葉色は濃緑で、ランナー発生数は多い。花の大きさと花柄の太さは大きく、花柄長は中で、花房当たりの果数は少ない。1 番果と 2 番果の花柄は株が旺盛になると帯化しやすいが、果実の融合は見られない。花芽分化や開花始め期は早で「とよのか」よりさらに早く、果実の成熟期は早で、季性は一季成りである。休眠性は極短で「さちのか」同様に冬季の矮化が小さい。耐干性は中で、灌水不足により葉先枯れがやや出やすい。花粉の耐高温・低温性は強で、奇形果の発生は少ない。花房間の葉数は 3～4 枚で、果房の出蕾は連続性がある。果形は円錐形で、そう果の落ち込みは小さい。果実の大きさは大きく、1 番果と 2 番果の果形の差は小さく、大きさの揃いが良い。果皮は鮮紅色で光沢があり、果肉色は白である。果実の香りは中で、糖度は高く、酸度が低いので糖酸比は高く、食味は良い。果実の硬さは果皮、果肉とも硬く日持ち、輸送性に優れる。4 月までの全期収量は「とよのか」より多収で、商品化率が非常に高い。

以上のように本品種は芽かぎ、摘葉が少なく良いことや果実が大きくて、硬く、奇形果が少ないので取り扱いやすいこと等の特性があり、栽培や収穫、出荷での省力化が図られる。

3. 栽培上の留意点

炭そ病、うどんこ病抵抗性は低いので、採苗時から防除につとめる。定植後の灌水不足は葉先枯れを起こすので十分に灌水し活着を促進する。また果実の着色を高めるためには果実への日当たりを良くする。

第1表 生育と形態的特性および生態的特性

品種	草姿	草勢	草丈	分けつ数	ランナー数	葉数	葉色	第1花房の花数	花芽分化期	開花始期	季性	休眠性
			(cm)	(本)	(本)	(枚)	(個)					
佐賀2号	や立性	強	19.2	1.0	17.3	7.9	濃緑	12.5	早	早	一季	極短
とよのか	や開張	や強	16.2	1.5	19.6	11.7	濃緑	16.1	早	早	一季	極短
さちのか	立性	強	20.2	1.9	18.9	14.8	濃緑	29.5	や早	や早	一季	極短

第2表 果実特性と収量性 (1994～1996年度)

品種	大きさ	形状	そう果の落ち込み	果実溝	果皮色	果肉色	光沢	硬さ	糖度	酸度	香り	全期収量 (4月まで)	
												収量	対比
佐賀2号	大	円錐	小	小	鮮紅	白	良	硬	高	低	中	631.3kg/a	100%
とよのか	大	円錐	中	中	鮮紅	黄白	良	や硬	高	中	多	541.3	86
さちのか	大	円錐	並	小	濃赤	淡紅	や良	極硬	高	中	中	582.6	92